



I LOVE HOMIN

なんともちんけなタイトルをつけたものだと思いますが、書き始めている。

1989年、協会の専従事務局員となった私は、またたく間に「法と民主主義」に魅せられ、虜になった。雑誌編集のやっかいさも、発刊までの右往左往も、時には面白く、まるでかなわぬ恋のように夢中にさせられた。やはり、「I LOVE HOMIN」なのだ。

一冊では机の上で立つこともできない頁数の雑誌なれど、平和と人権と民主主義を願う、良心と知恵と勇気の塊が、毎号誌面を埋めつくす「HOMIN」と、ともに過ごした31年間は、私の宝。

実は、504号の「ひろば」に、編集業務を辞するにあたり「I AM HOMIN」と題して、思いの丈を書き綴らせていただいている。なのに、なぜかそれから4年半もの間、手渡したはずのバトンがわが手に残され、本号まで歩いてきてしまった。

しかし、この4年半の「法民」編集委員会は、ウソとごまかしの政権との闘い、改憲阻止の法律家の運動、原発、冤罪、ジェンダー等々の特集企画を展開し続けてきた。執筆者の層の広がり、法律家にかぎらず、市民や事件当事者などにも必要とされる「法と民主主義」を送り出してきた。その素晴らしい仕事に携わることができて、思いもかけない幸せな時間をいただいたと思っている。

来月号には、新型コロナウィルスをとりあげる、その先に、60年目の安保条約についてと、素晴らしい企画が立て続けに準備されている。もう、何の憂いも心配もなく、落とすことのないバトンが手渡せたと思っている。これからの「HOMIN」を楽しみに待っている。

昨夜、昔の夢を見た。銀座通りを台車を押しながら、「京橋通り郵便局」に「法と民主主義」の発送にむかっている私。足早に歩く人々をよけながら、少しスピードをあげた途端、台車が傾き、区分けした「法民」の束が崩れ落ちる。悄然とたたずむ私のまわりには、道路工事の人、コンビニの店員さんがかけより、手を貸してくれた。「これ、ひとりで運ぶの?」「そう、あと3回」「ひでえー」。さしずめ、現在だったら、協会は、「ブラック企業」?

当時は3000部発行、第三種の許可をとっていたため、郵便番号に基づき、独特の仕分けが義務付けられていた。現在のように、郵便局から集配に訪れるなど夢みたい。毎月、郵便局に運ぶのも、

私の仕事。でも、そう苦に思っていなかった。むしろ、少し誇らしげに、窓口に積み上げた「法民」に手を添え、「ヨロシクネ」と局員に笑顔をふりまいていた。

京橋から四谷、そして新宿御苑と協会本部の2回の引っ越しを経験した。

四谷の伊藤ビルに、ある夏の日、涼しげなワンピースに巾着をさげた老婦人の突然の訪問。一人で事務局にいた私、「ここでは、法律相談は行っておりません。上の階にご紹介しましょうか?」と対応。「なにいてるの、私よ、ワタシ。相磯、アイソよ」「ええー、あの相磯先生!……いつもいつも多額のカンパ、ありがとうございます」しどろもどろの私。「今日は、もう少しもってきたからね」「まさか100万!」なんと、えげつない言葉。「0の数がちがうね」「ま、まってください、6桁以上、私ダメなんです」本部事務局から一番近いオフィスにいる佐藤むつみ先生に電話……。次から次に、笑みをうかべた相磯先生の口元から飛び出す信じがたい提案事項の数々。むつみ先生、近くにあった紙に書き留めていく。相磯先生からの署名まで頂戴する。なんと、法律家みtainな仕草。そうか、むつみ先生は、法民の編集長のみならず、弁護士だったのだ。これがそもそも、現在の新宿御苑の本部事務局のビルを破格の条件でお貸しいただいている相磯まつ江先生との歴史的な出会い。

心底「法と民主主義」を愛し、大切に思ってくださっていた相磯先生。この雑誌には、骨がある。未来を見通す展望を示している。誉め言葉をいくつものべながら、「それにしても薄すぎる。電話帳みたいなもの創れんかね」が口癖のあの相磯先生には、もうお会いできない(合掌)。

「法と民主主義」の発刊を支えてくださった、全国の会員・読者とともに、歴代の理事長・事務局長・各委員会や執行部の方々を思い起こしている。好奇心旺盛で心熱い編集委員会での激論も懐かしい。責了日を前に、手分けして素読み作業をした事務局の仲間、印刷寸前にミスを発見する印刷所の凄腕さん。数え切れない人々によって、私は、今日まで「HOMIN」に関わってこられた。なんたる幸せ。心からの感謝と拙い私の所作への謝罪もこめて、最後のご挨拶を。

お世話になりました。

ありがとうございました。

(林 敦子)